

野田宇太郎
文学散歩

第8卷

文一総合出版

著者略歴 明治42年(1909)10月、福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念、久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで、出版編集に携わる。その間、雑誌『文藝』、つづいて『藝林閑歩』の編集責任者となり、以後、著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他、全詩集『夜の鯛』、近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』、木下杢太郎研究『きしのあかしや』、近代詩史『詩人と詩集』、キリシタン史『少年使節』、紀行随筆『日本の旅路』、戦中記録『灰の季節』、戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年、第1回九州文学賞(詩)受賞、昭和50(1975)年度藝術選奨文部大臣賞受賞、昭和52(1977)年、第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩 8
湘南相模野文学散歩

昭和53年10月5日 初版第1刷発行

著者 野田宇太郎

発行者 佐藤 弘一

発行所 株式会社文一総合出版 東京都千代田区神田神保町1-32
電話東京(291)8049 振替東京2-42149

©1978 0395-90108-7354
定価は、函・帯に表示してあります。

印刷・製本 奥村印刷

目次

横浜

横浜

生麦にて

望欣台

桑門辨玉の墓

桜木町駅

掃部山

公園にて

瓦斯灯

吉田橋

岡倉天心生誕地

横浜港

と思い出の文学者達

ヘボン邸址

ゲーティー座

外人

墓地

「二房の葡萄」の道

金沢まで

三浦半島

半島の旅

三崎

本瑞寺

向ヶ崎

城ヶ島

見桃寺

若山牧水と北下浦

三

金

二

二

湘南

瀟湘湖南

二七

逗子の砂

二八

柳屋の獨歩と蘆花

『不如帰』の海

「相模灘の落日」

岩

殿寺と鏡花

鎌倉

二九

鎌倉というところ

實朝の墓

近代文学と鎌倉

滑川河

口にて 砂丘

大仏附近

蒲原有明の故家

「夕日」

ざよふ妙本寺」

建長寺の葛西善藏

東慶寺にて

円覚

寺の漱石と藤村

七里ヶ浜と江ノ島と

三〇

相模海岸

鵠沼海岸にて

三一

獨歩と南湖院

二〇一

高山樗牛終焉の地

二〇〇

大磯

二四

藤村の墓

新島襄終焉の地

国府津海岸

二三五

長泉寺と北村透谷

小田原

二二六

透谷生家跡

透谷追慕の碑

透谷の墓

白秋と伝聲寺

真鶴まで

二二五

湯河原と獨歩

二六四

相模野

相模野の古歌と大山

二七三

「西班牙犬の家」の自然

二八二

『田園の憂鬱』の世界

二五三

鶴間林間草廬の歌

三〇八

津久井の文士

三八

*別刷写真はすべて著者の記録撮影で
本文と共に無断使用を禁じます。

湘南・相模野文学散歩 おぼえがき

本巻の「湘南」は昭和三十七年現在の記録である。湘南は本来相模湾に臨む鎌倉、逗子、葉山あたりの美称だが、ここでは地理的便宜上、横浜から三浦半島、及び東海道沿いの茅ヶ崎から小田原、またその先の湯河原までの相模湾沿岸の総称とした。相模海岸から伊豆半島に互る文学の調査を始めたのは昭和二十七年頃に遡るが、それから十年目によりやく湘南の完結をみた。その後の観智なき国土開発の連続で湘南も次第に本来の自然の姿を失い、それはただ近代文学の中にのみ生きていると云ってよい。

「相模野」はこれまで文学散歩には未収録のままだったが、本巻の刊行を機に昭和五十三年五月から七月にかけて更めて調査を行ない、その記録をここに収めた。

(著者)

湘南・相模野文学散歩

横

浜

横 浜

生 麦 に て

一八四三年六月三十日、ロンドンのクラブトンでアーネスト・サトウ Ernest Mason Satow が生れた。

アーネストの父はスウェーデンの貿易商でハンス・ダビッド・クリストファー・サトウと云い、早くから祖国を離れて、ドイツ、フランス、ロシアなどを転々し、イギリスに来てロンドンに定住したのは一八二五年であった。そこでイギリス婦人マーガレット・マソンと結婚し、十一人の子を挙げたが、その四番目の男子がアーネストであった。

旅行家だった父の影響をうけてアーネストはロマンティックな少年として育ち、海外への好奇心は特に強かった。或る日、兄の一人がミューディ図書館から一冊の本を借出して来たが、それはローレ

ンス・オリファントという外交官の書いたもので、『エルギン卿の支那及び日本使節記』というのだった。オリファントはイギリスから東洋に派遣された使節エルギン卿の秘書として、一八五八年（安政五年）にはじめて日本を訪れ、長崎から江戸などを旅して駐日公使館一等書記官になり、日英修交通商条約締結の折にはイギリス代表の一人として加わっていた人である。兄が借出して来たこの本を何気なく読んだアーネストは、はじめて日本という国名を知り、まるでお伽話の国のようだと思った。日本への憧憬が少年アーネストの心に芽生えた。

秀才少年だったアーネストは、十八歳のとき外務省の通訳生試験を受けてみた。見事に合格通知をうけた彼は幸福だった。しかも、その夢のとおり、彼は日本駐在を命じられたのだ。

——この青年外交官が程なく日本を訪れ、その後約二十五年間幕末から明治初期の日本に住んで、日本及びその周辺に関する著述凡そ四十餘種をのこすことになった、偉れた教養人アーネスト・サトウである。アーネスト・サトウはイギリス随一というよりも、ヨーロッパ随一の日本学者となった。ラテン語、イタリア語、スペイン語などにも通じて、日本の吉利支丹遣欧使節に関する文献の英訳などもそのおもな功績の一つである。外交官を退いてからは『日本に於ける一外交官』*A Diplomat in Japan* などの貴重な回想記^{メモリアル}の著述をし、またイギリス古典文学の研究にも没頭し、その他多くの文化功勞によってサー（卿）の称号を許された。生涯独身で、晩年はデウォンシャイアのおタリ・セント・マリーに隠棲し、そこで八十歳の長寿を全うした。歿したのは一九二九年（昭和四年）八月二十六日である。――

いよいよ日本への旅についた通訳官アーネスト・サトウは、十九歳になった一八六二年九月八日、横浜の港に上陸第一歩を印した。日本の文久二年八月十五日のことであった。

一八六二年といえば、日本はアメリカ、イギリス、フランス、オランダ、ロシアの五カ国との間に交易をするようになって、横浜のほか長崎、函館を開港場とした安政六年（一八五九）六月二日から三年目のことである。大老井伊直弼による安政の大獄の波紋がひろがり、内憂外患に国内はひしめきあっていた。しかし開かれて間もない港横浜は、さみしい漁村に続いて木造平家建ての洋館が点々とたむろするような閑散とした治外法権地帯で、一見平和でもあった。

通訳官サトウは上陸した翌日、横浜から少し江戸に寄った神奈川に案内され、そこで日本語会話書の執筆をしていたアメリカ人宣教師 S・ブラウンや、医師で日本語の英訳辞典や聖書の日本語訳など困難な言語学の仕事に携わっていた J・G・ヘボンなどに先ず紹介された。

その頃の日本で通用する外国語は、まだオランダ語であった。さしずめオランダ語に代ってアメリカ人やイギリス人の英語を普及せしめることもサトウの任務の一部、と云ってよかった。西洋五カ国の商人たちが日本人と交易するとき、オランダ語のほかにマレー語がまじっていた。それは「ペケ」とか「サランバン」などの特殊な言葉であったが、「ペケ」は駄目、「サランバン」は破壊という強くはつきりとした単語で、それに日本語の「あなた」とか「あります」をつけ、「あなたペケあります」とか「サランバンあります」といえば、最も早く相手の日本人にも通じて重宝がられていた。

まだ、ようやく日本に来たという夢のような思いだけがいっぱい、仕事も手につかず六日目を

迎えた一八六二年九月十四日、突如としてサトウの夢を破る事件が、神奈川の東海道筋生麦というところで勃発した。

当時上海から横浜に来ていたイギリス人の商人リチャードソンが、薩摩藩主の行列護衛の武士によって惨殺された、所謂生麦事件である。

その日、文久二年八月二十一日、リチャードソンは、これも香港から横浜に来ていたボラデル夫人と、ウッドソープ・C・クラーク、ウイリアム・マーシャルの二人の横浜在留商人と共に、神奈川と川崎との間の東海道に遠乗りして餘暇を娛しんでいた。そのとき江戸から鹿児島へ帰国する薩摩藩主島津久光の行列に出逢った。大名行列のきびしいしきたりを知らぬ四人は、ただ物珍しくそれを眺めながら馬を進めていた。すると行列から一人の家臣が近づいて来て、いきなり道路の脇に寄れというような手振りをして何か叫んだので、四人は脇に寄った。やがて藩主の豪華な駕籠が見えた。すると今度はその駕籠の近くから険しい面構えの武士が四人のところに走り寄って来て、引き返せというような手ぶりをした。理由もわからぬままに、四人は顔見合せて馬首を返した。そのときだった。行列の中から別の武士数名が跳るようにしてこちらに駆け寄って来るなり、ぎらりと長刀を抜き放ったかと思うと、馬上目がけて斬りつけて来た。全く咄嗟の、あまりにも無法な恐るべき出来事だった。先頭にいたリチャードソンは、どうする暇もなく斬り落されていた。他の二人の男にも魔の白刃はきrameきかかった。身をかわす隙もなく、傷の痛みが全身をしびれさせた。ボラデル夫人は恐怖のためになだ呆然と馬上に立竦んでいたが、男の一人が深傷をうけながらも「早く馬を飛ばして……貴女